

白 石 遺 跡

福岡県八女市大字祈祷院字白石所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第61集

2000

八女市教育委員会

序

昭和60年廃止になりました旧国鉄矢部線は、筑後市の羽犬塚駅から黒木町の黒木駅を結ぶ鉄道として地域の住民に親しまれていました。廃止後は県道や市道として改良が行われたため、車の利用が増大しており、沿線周辺では開発が進んでいます。今回はこの道路の南側に隣接して無線基地局が建設される事になり、建設前に発掘調査を実施したものです。

発掘調査にあたりまして、エヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社には、終始文化財保護のため御協力いただきました。心から感謝申し上げます。

平成12年3月31日

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一

例 言

1. 本書は八女市教育委員会がエヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社の委託を受けて実施した福岡県八女市大字折神院字白石所在、白石遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は参加者で行い、現場写真は赤崎が撮影した。
4. 出土した遺物の整理は岩戸山歴史資料館で行い、同館で保管している。
5. 本書の執筆、編集は赤崎が行った。

本 文 目 次

1. はじめに.....	1
2. 位置と環境.....	2
3. 発掘調査の概要と経過.....	5
4. まとめ.....	20

1. はじめに

白石遺跡は福岡県八女市大字折袴院字白石^{しらいし}33番地の2に所在する。

調査の発端は、エヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社、携帯電話の通話エリア拡大のため当該地に無線基地を建設する計画がされたことによる。事前の協議で、当該地が周地の遺跡である折袴院遺跡の北側隣接地であるところから、遺跡の存在が考えられた。このため、平成11年7月2日付けで試掘調査届が提出され、それを受けて平成11年7月9日に試掘調査を実施した。この結果、弥生時代から古墳時代の包含層が発見され多量の土器が出土した。このため、両者で協議を行い発掘調査を実施することとなり、平成11年7月19日付けで発掘届が提出された。発掘届後、平成11年7月29日に発掘調査の依頼が提出され、平成11年9月30日埋蔵文化財発掘整理調査委託業務契約書を締結した。

発掘調査は平成11年10月4日に開始、天候にも恵まれ、平成11年11月26日に現地での調査は終了した。引き続き多量の土器の整理調査に着手し、平成12年3月31日に完了した。

調査関係者は次のとおりである



第1図 白石遺跡発掘調査前（北から）

福岡市中央区舞鶴2丁目3番1号

エヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社

代表取締役社長 高橋 豊久

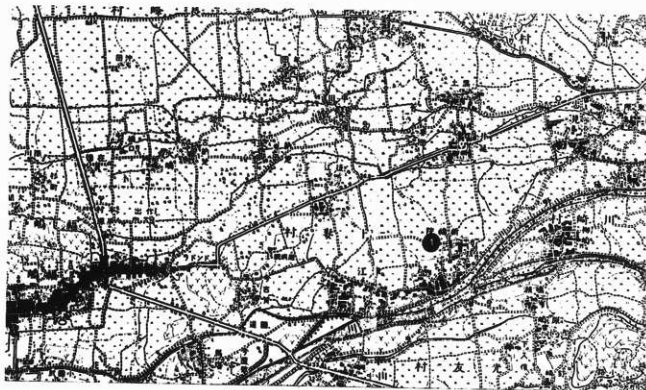
八女市教育委員会

教育長	樋口 欽一
教育部長	石松 憲治
生涯学習課長	大隈 繁敏
生涯学習課長補佐	志岐 徳
文化財係長	赤崎 敏男 (調査担当)
文化財係	中川寿賀子
文化財係	大塚 憲治
文化財係	森田 尚美
文化財係嘱託	山田 朗子

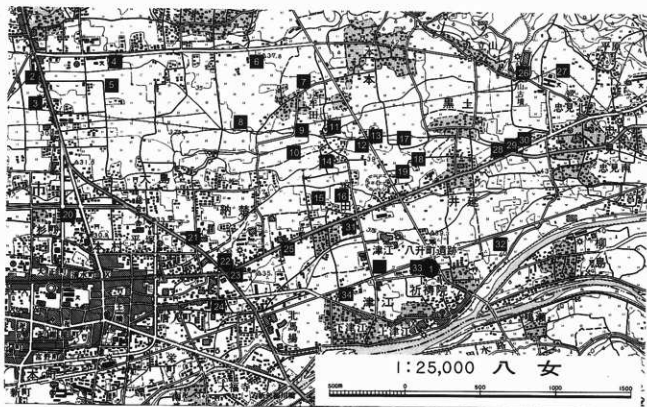
2. 位置と環境

白石遺跡は星野村に流れを発した星野川が、矢部村に流れを発した矢部川に合流する地点から北側約300mにあり、矢部川によって形成されたほぼ東西にのびる低位の段丘上にある。この付近は築堤以前は両河川による氾濫の常襲地帯で、周辺には河川が氾濫を繰り返した痕跡が良く残っている。遺跡の周辺での標高は36m前後で、地形は南に向かってわずかではあるが傾斜している。

遺跡の周辺は県道の改良工事が行われたために最近市街地化が進み、工場等が建設されている。これに伴って埋蔵文化財の発掘調査も増加している。周辺の遺跡を概観すると、弥生時代の遺跡として南側に隣接して祈祷院遺跡があり、弥生時代の遺物が採集されている。弥生時代・古墳時代の遺跡として、北東側約500mの津ノ江遺跡(上妻小学校校庭遺跡)では昭和63年と平成11年の調査で弥生時代と古墳時代の竪穴住居、貯蔵穴、墳墓が、北東側約1,000mの高島遺跡では平成8年と平成11年の調査で弥生時代の竪穴住居7軒、土壇7基、と旧河川が発見されており、多量の遺物が出土している。西側約1,100mの熊野遺跡では弥生時代の竪穴住居38軒、土壇205基、環濠1のほか、土壇墓、甕棺墓など58基の墳墓が発見されている。また、古墳時代では竪穴住居2軒と、竪穴式石室を主体部とする古墳が発見されている。隣接する赤氏遺跡でも弥生時代の竪穴住居約35軒、掘立柱建物、土壇約50基、土壇墓、甕棺墓が発見されている。東側約400mにある高野町遺跡からも弥生時代の竪穴住居6軒、土壇16基、古墳時代の竪穴住居46軒、掘立柱建物4棟、土壇16基などが平成5年の調査で発見されている。平成10、11年度には白石遺跡の東側500mから200mにかけて、道路改良工事に伴って津江八升町遺跡の発掘調査を行い、弥生時代の竪穴住居、土壇や大規模な整地跡が発見されている。

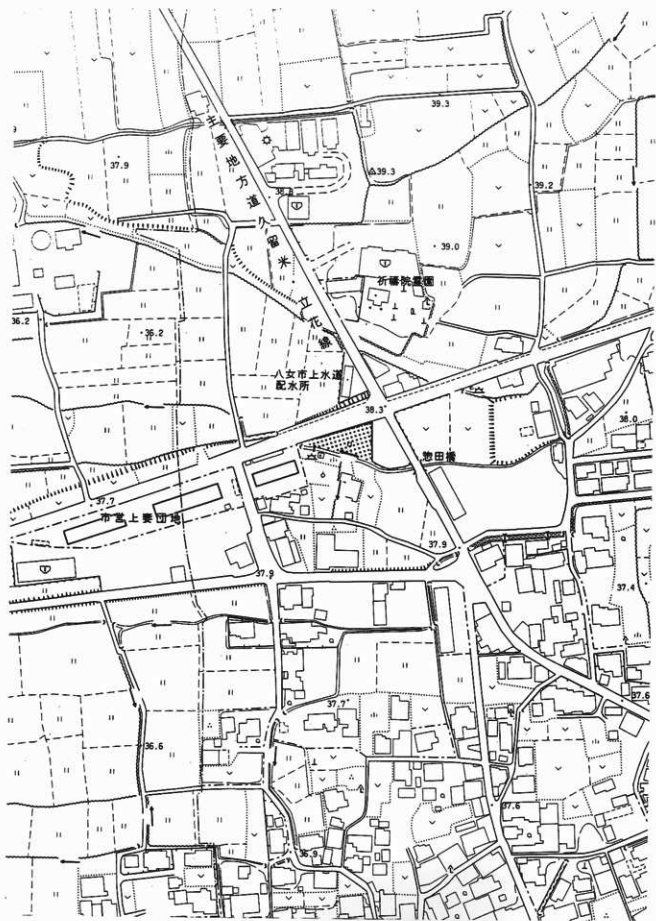


明治30年頃の白石道跡周辺の地形図



- 1.白石道跡 2.美男川道跡 3.下古田地区条里 4.道手道跡 5.長峰地区条里 6.餅田道跡 7.枕林道跡 8.丁ノ坪道跡 9.永尾道跡
10.西原道跡 11.千松道跡 12.尺取道跡 13.口ノ坪道跡 14.平田・野内道跡 15.平田・六反田道跡 16.北ノ前道跡 17.十郎丸道跡
18.野ノ内道跡 19.春田道跡 20.福島中学校校庭道跡 21.万上田道跡 22.赤氏道跡 23.熊野道跡 24.鈍土羅石榎・本町道跡
25.高島道跡 26.丸山古墳 27.西小牟田道跡 28.中園道跡 29.黒土・新替道跡 30.風流松道跡 31.後ノ江道跡 32.高野町道跡
33.折神院道跡 34.津ノ江道跡

第2図 白石道跡周辺の道跡分布図 (1/25,000)



第3図 白石遺跡調査位置図 (1/2,500)

3. 発掘調査の概要と経過

1. 調査の概要

今回の発掘調査地点は、開発面積350㎡の内、無線基地局の鉄塔の建設によって掘削される、100㎡を対象として調査を実施した。調査は、耕作土下までの土をバックホーで除去した後、ベルトコンベアーを用いて手堀で整地層の上層、下層各面で遺構の調査を行いながら礫層まで掘り下げを実施した。当該地の調査以前について、北側は旧矢部線の路床で、南側は農業用水路に挟まれており、湿地状の水田であった。

2. 調査経過

平成11年10月4日、本日より調査開始する。調査地点及び周辺の草刈りを行う。

10月5日、本日よりバックホーを入れ、地表下約50センチになる整地層上面まで掘削を行う。各現場より器材を運搬する、一部手作業で掘削の結果、多量の土器が出土する。

10月6日、整地層上面で遺構を確認した結果、整地層を切り込んで東西方向に溝と柱穴が検出され、掘り下げを開始する。

10月12日、溝の掘り下げを行う。整地層上面での写真撮影を行う。北側から実測にかかり、東側から整地層上層の掘り下げを行う。

10月14日、整地層上層の掘り下げを続けるが土器が多量に出土する。遺物多く、取り上げのため一辺3mの区画を設定し1から12区に分ける。

10月19日、整地層上層の掘り下げを続けるが下層の土器が量的に少ない。

10月25日、下層の掘り下げを続ける。高杯杯部の完型品が出土。

10月27日、南側整地層掘り下げを続けほぼ完了する。

10月28日、整地層下層の掘り下げを終了した後、浮遺構の検出作業を行い、西から東に溝状の遺構と柱穴が確認された。

11月4日、溝状遺構の掘り下げを続ける。東側より鉄さいが出土する。

11月8日、遺構全体の写真撮影を行う。撮影後、水糸を張り実測を開始する。

11月11日 遺構の実測と土層の実測を続ける。

11月22日、最下層の遺溝面にコンタを入れる。

11月24日、壁の両側にトレンチを設定、土層の堆積状況を確認する。

11月26日、現場の器材を撤去、本日で現場の作業を終了する。

3. 遺構と遺物

今回の調査は狭い調査のため、遺構として検出されたのはわずかであるが、調査の結果、耕作土、旧耕作土下より整地層が検出された。整地層は厚く大きく上層と下層に別けることができた。上層面で遺構の確認を行ったところ東西に伸びた溝1条と柱穴10個が検出された。整地層上層を掘り下げた結果、多量の弥生式土器が出土、続いて下層面での遺構の確認を行ったところ、遺構は検出できなかった。整地層下層を掘り下げた結果、上層より少ないが弥生式土器が多く出土した。下層面下で遺構を検出したところ溝状遺構1、土壇1基、柱穴3個を確認した。

(1) 整地層上層の遺構 (第4図)

耕作土を約40cmから50cm掘り下げたところで整地層の上面が検出され、整地層を掘込んだ溝と柱穴が確認された。

溝 (SD01)

調査区の南端では東-西方向に、東側で幅1.6m、深さ0.65m、西側で幅1.4m、深さ0.55mの溝を10m検出した。溝は西端から2mの所から、幅0.6mの小溝が分かれる。溝の底面は平坦で東西側とも高低差がほとんど無いが、小溝の西側が高いため、溝は西から東に流れていたものと考えられる。溝内の土層を見ると、溝は整地層の上層から下層を切り込んでおり、溝内の土層を見ると第1層は灰褐色土で整地層の茶褐色土をわずかに含んでおり、東側では灰褐色土に砂がやや多く混じる。2層は鉄分の多い灰褐色土、3層は親指大の小石を含む灰褐色土、4層は鉄分の多い茶褐色土で3層と4層の境に鉄分が多く沈着しており、溝が長期間使用されていたものと考えられる。遺物としては弥生式土器がわずかに出土したが、整地層の遺物と思われる。

柱穴 (P)

10個の柱穴が確認された。直径20cmから30cm、深さ9cmから15cmである。遺物は出土していない。

(2) 整地層下層の遺構 (第4図)

整地層上層の茶褐色土約直径25cmから40cmを下げた面で下層上面の遺構の確認を行った。その結果明確な遺構は確認できなかった。このため、下層の掘り下げを行い、下層を除いた面での遺構確認をした結果、土壌1基、溝状遺構1、柱穴3個を検出した。

土壌 (SK01)

溝状遺構を下げた面で検出された。長さは1.37m×1.10mで隅丸方形である。深さは20cmから30cmで、床面は砂礫のため凹凸がある。遺物は甕形土器が出土している。

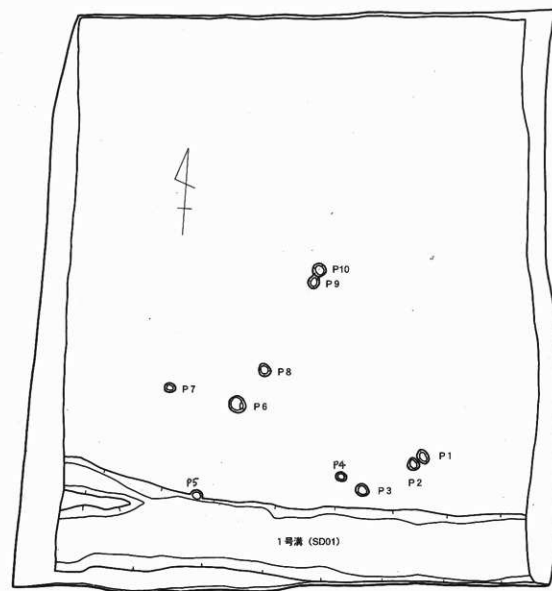
溝状遺構 (SX01)

調査区の南側に南西から北東方向に浅い溝状遺構が検出された。溝状遺構は最も狭い部分で約4m、北東側は大きく広がっている。溝状遺構は細かな砂質土を掘り込んでおり、床面の凹凸も大きく、南西側と北東側の床面は約20cmの高低差がある。遺物は南西側に完型の土器等の出土が多く、北東側からは大きめの鉄滓が出土している。このほか、床面には長さ70cm、幅50cmの範囲で炭化物も残っていた。

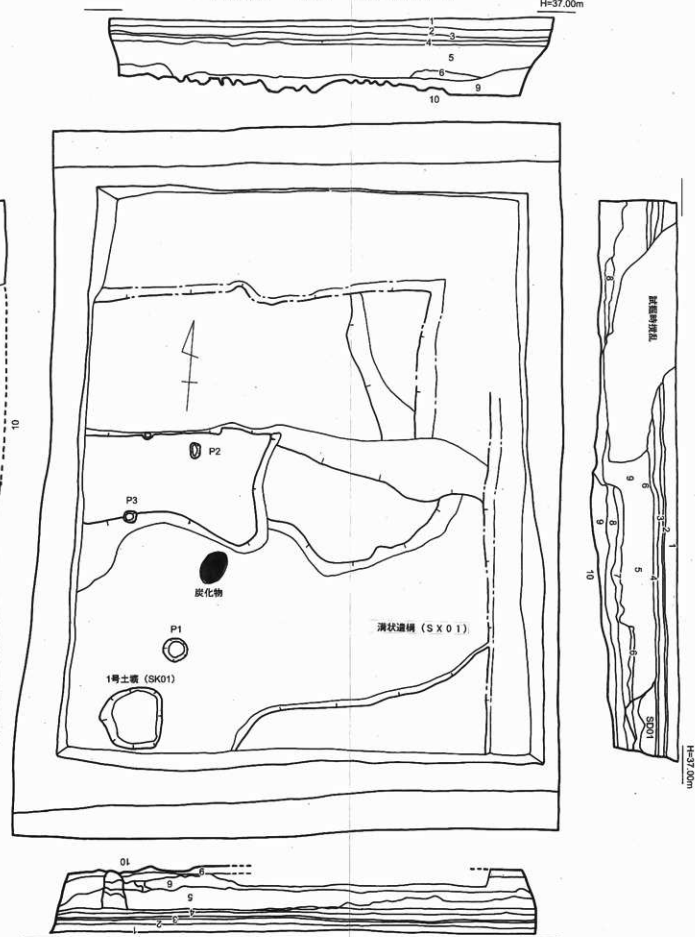
柱穴 (P)

柱穴は溝状遺構を掘り下げた段階で3個が確認された。P-1は直径50cm、深さ11cmで二重口

整地層 上層 遺構配置図



整地層 下層 遺構配置図



第4図 白石遺跡遺構配置図 (1/80)

縁の壺形土器が出土、P-2は直径33cm×20cmの楕円形で、深さ20cm、P-3は直径20cm、深さ15cmで遺物は出土していない。

(3) 層位

発掘区が狭かったため、土層の観察によって十分な盛果を上げることが出来なかったが、四壁の土層が複雑なため、各壁の層序を示して見た。

東壁

- 1層 20cm～35cm。現在の水田耕作土。
- 2層 4cm～8cm。 現在の水田耕作土の床土。
- 3層 10cm～15cm。旧水田耕作土。
- 4層 5cm～10cm。 旧水田耕作土の床土。
- 5層 45cm～65cm。砂質の茶褐色土でやや粘質がある。上層の整地層で多量の土器が出土する。
- 6層 7cm～11cm。 暗茶褐色砂質土で遺物の量は少ない。下層の整地層
- 7層 13cm～22cm。暗茶褐色土で遺物の量は少ない。下層の整地層
- 8層 17cm～23cm。溝状遺構の堆積土。遺物の量は少ない。
- 9層 8cm～33cm。 暗灰褐色細砂質土。下層の礫層の間に入り込む。
- 10層 砂礫層。人頭大の礫も多く含む。

西壁

- 1層 20cm～35cm。現在の水田耕作土。
- 2層 8cm～17cm。 現在の水田耕作土の床土。
- 3層 5cm～14cm。 旧水田耕作土。
- 4層 5cm～7cm。 旧水田耕作土の床土。
- 5層 40cm～60cm。砂質の茶褐色土でやや粘質がある。上層の整地層で多量の土器が出土する。
- 6層 10cm～20cm。暗茶褐色砂質土で遺物の量は少ない。下層の整地層
- 8層 12cm～15cm。溝状遺構の堆積土。遺物の量は少ない。
- 9層 10cm～45cm。暗灰褐色細砂質土。下層の礫層の間に入り込む。
- 10層 砂礫層。人頭大の礫も多く含む。

南壁

- 1層 12cm～15cm。現在の水田耕作土。
 - 2層 7cm～15cm。 現在の水田耕作土の床土。
 - 3層 8cm～14cm。 旧水田耕作土。
 - 4層 8cm～12cm。 旧水田耕作土の床土。
 - 5層 45cm前後 砂質の茶褐色土でやや粘質がある。上層の整地層で多量の土器が出土する。
- SD01に切り込まれる。
- 6層 15cm～20cm。暗茶褐色砂質土で遺物の量は少ない。下層の整地層で深くなる。
 - 9層 35cm前後 暗灰褐色細砂質土。下層の礫層の間に入り込む。

10層 砂礫層。人頭大の礫も多く含む。

北壁

- 1層 15cm～28cm。現在の水田耕作土。
2層 12cm～15cm。現在の水田耕作土の床土。
3層 5cm～12cm。旧水田耕作土。
4層 7cm～10cm。旧水田耕作土の床土。
5層 45cm～70cm。砂質の茶褐色土でやや粘質がある。上層の整地層で多量の土器が出土する。
6層 一部しか残っていない。暗茶褐色砂質土で遺物の量はやや多い。
9層 55cm 暗灰褐色細砂質土。下層の礫層の間に入り込東側が厚い。
10層 砂礫層。人頭大の礫も多く含む。

(4) 出土遺物

整地層上層出土・弥生時代の遺物

壺形土器 (第5図)

壺形土器の出土は量的に少ないが、口縁の形態により3種類に区分できる。

1類 (1) 複合口縁の壺形土器で口縁部は袋状で「く」の字に強く折れる。内外とも荒い刷毛目調整。

2類 (2) 二重口縁の壺形土器で、胴部より強く屈曲する。口縁部は垂直に立ち上がり端部は丸くつくられる。内外とも荒い刷毛目調整。

3類 (6・7) 口縁部が外方に大きく開く、口唇部には刻目が施され、口縁部と胴部の境に貼り付けの突帯を巡らしている。最大径は胴部中程にある。胴部外面は縦方向のタタキ調整後斜め方向の細かな刷毛目調整。

直口壺形土器 (3～5・11～12) 口縁部はわずかに外方へ開き直立するものと、わずかに折れるものがある。外面は刷毛目後横ナデ、内面は横方向の刷毛目が多い。

無頸壺形土器 (第5図)

1類 (8～9) 口縁部はわずかに外方へ開き端部は丸くつくり、胴部に最大径がある。内外とも荒い刷毛目調整で外面に一部タタキ調整が残る。

2類 (10) 口縁部が外方に折れ、口縁部から胴部の径が大きくなり、胴部が角張る。

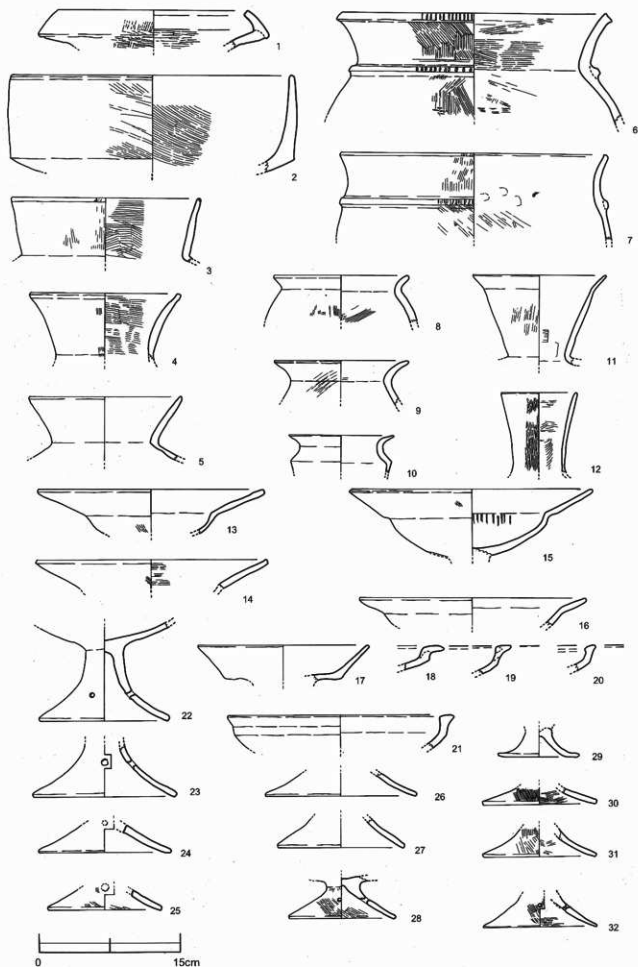
高杯 (第5図)

長脚の高杯と短脚の高杯がある。

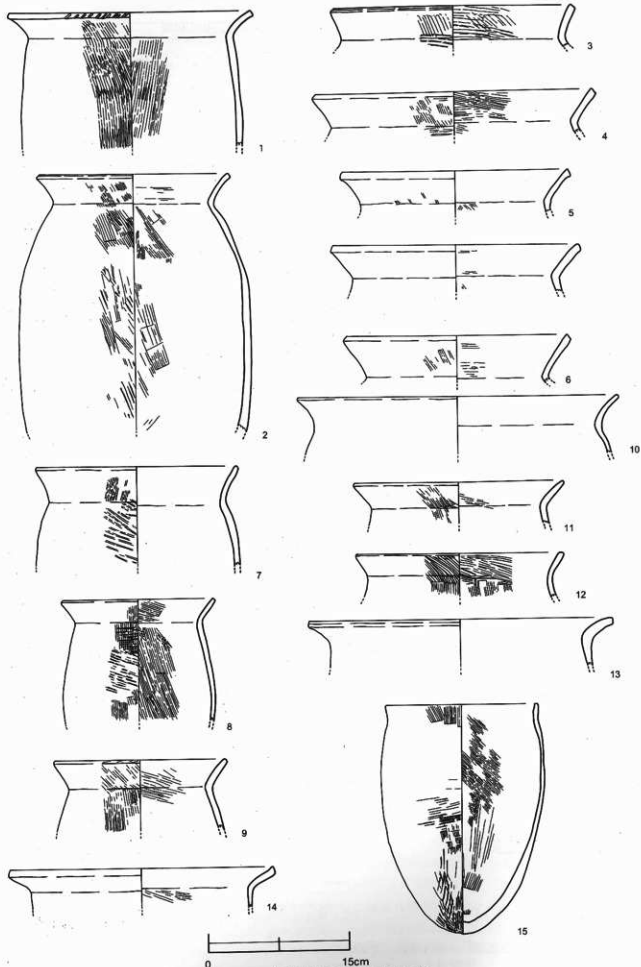
思われる。杯部が薄くつくられ口縁部は「T」字形か外方にやや下がり気味になる。内外面ともなで調整。

1類 (13～23) 杯部の薄くつくられ口縁部が外方に大きく開き、丸みを持った杯部に続く。脚部は細長い脚と思われ、内外面とも細かな刷毛目調整。一部の杯内部に暗文が施されている。

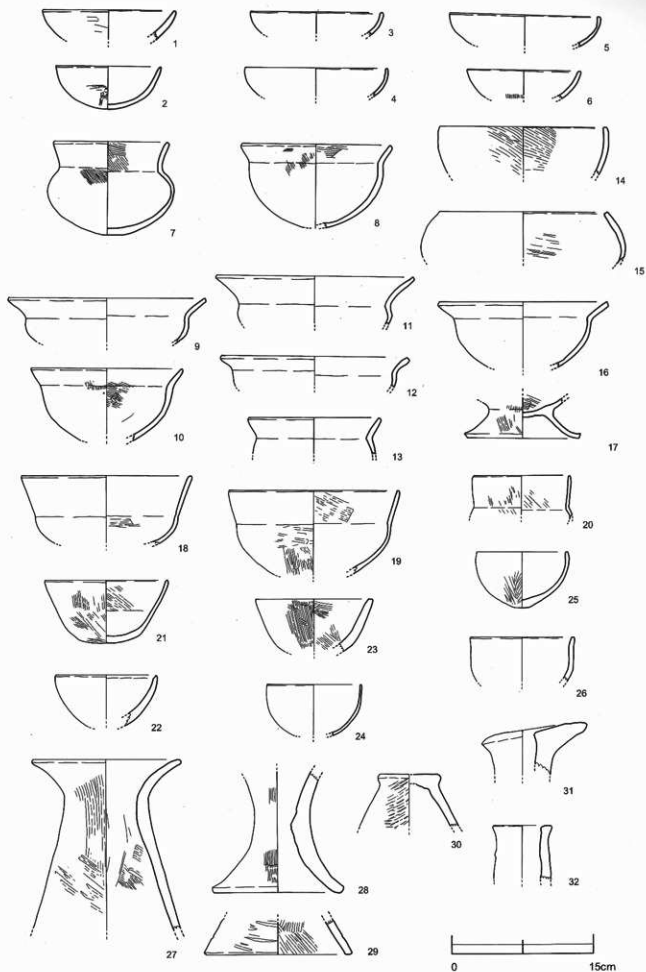
2類 (18～21) 杯部の口縁部が折れ「T」字形になり、丸味を持った杯部に続く。脚部はやや長めの脚で脚部中程に3ヶ所の穿孔がある。



第5図 整地層上層の出土土器〔1/4〕



第6図 整地層上層の出土土器〔1/4〕



第7図 整地層上層の出土土器 (1/4)

3類(24~32) 短脚の高杯で、杯部は碗状になると思われ、脚部中程に3ヶ所の穿孔がある。内外面とも刷毛目調整。

壺形土器(第6図)

壺形土器は最も多く出土しており2種類に区分できる。

1類(1~6) 口縁部が「く」の字に折れ外方に開く。口縁端部はやや角張り、口唇部に刻み目を施すものもある。胴部は余り張らず口縁部径より胴部径のやや大きいものもある。口縁部は細かな刷毛目調整で、胴部外面は刷毛目とタタキ調整があり、内面は荒い刷毛目調整。

2類(7~15) 口縁部はほぼ直立し、胴部も膨らみを持ちながら尖り底の底部に続く。外面はたて縦や横方向のタタキ調整でタタキ後に刷毛目調整を施す。

鉢形土器(第7図)

鉢形土器は口縁部の形態にわり3種類に区分できる。

1類(7~17) 口縁部は外側に「く」の字に立ち上がり、底部は丸底となる。外面は細かな刷毛目調整で内面は荒い刷毛目調整が行われている。量的には少ないが脚付もある。

2類(18~20) 口縁部は外側に弱い「く」の字に立ち上が。外面は荒い刷毛目調整で内面は細かな刷毛目調整が行われている。

3類(14・15・21~26) 碗状のもので多くは小型である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部はやや角張った感じとなる。内外面とも荒い刷毛目調整が行われている。

碗形土器(第7図)

(1~6、14~15) 口縁部はほぼ直立し、底部は丸みを持っている。外面は細かな刷毛目調整とナデ調整が行われている。

器台(第5図)

(27~29) 両端とも大きく外方に開き鼓状となる。外面は斜め方向のタタキ後、縦方向の荒い刷毛目調整がよく残り、内面は細かな刷毛目や斜め方向の荒い刷毛目調整がされている。

支脚(第7図)

(30) 上端が平坦で脚部が広く開く。すぼまったもので、上端中央部に穴がけられている。外面は斜め方向のたたき目が残る。

(31) 上端が傾斜し、角状の突起がある。円筒形で厚くつくられている。

(32) 円筒形で薄くつくられている。端部が丸い。

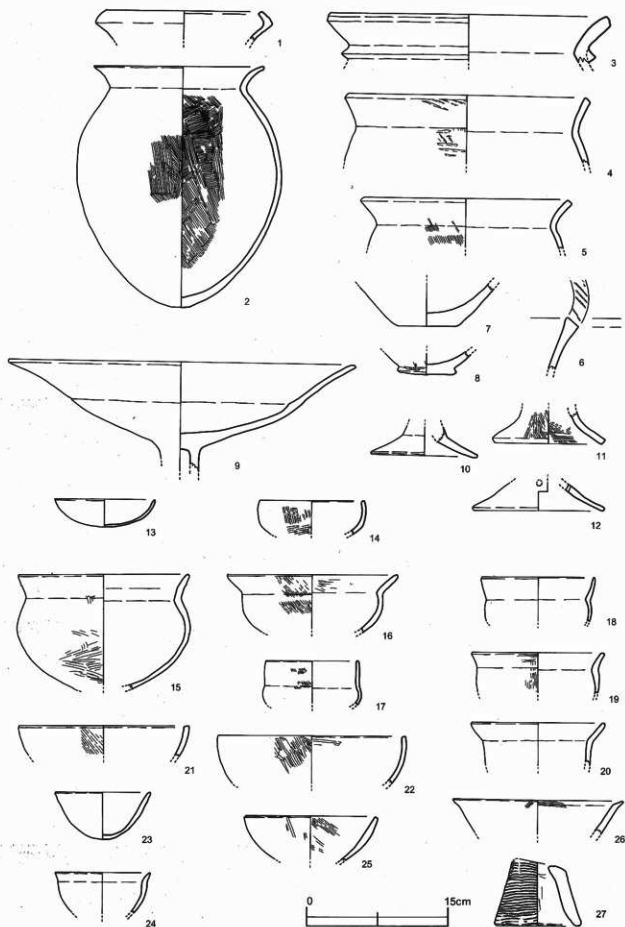
整地層下層出土・弥生時代の遺物(第8図)

整地層下層から出土した遺物は、上層から出土した遺物と比較して量的に少ない。

壺形土器(第8図)

1類(1) 複合口縁の壺形土器で口縁部は袋状で「く」の字に強く折れる。

2類(2) 完形の壺形土器で、口縁部はやや外反する「く」の字の口縁で、肩の張らない球形の胴部から丸底の底部に続く。胴部内外面とも荒い刷毛目調整が行われている。



第8図 整地層下層の出土土器 (1/4)

甕形土器（第8図）

甕形土器は2種類に区分できる。

1類（3）口縁部が「く」の字に外反し、口縁部と胴部の境に三角形の貼り付け突帯がある。端部はやや角張り、口唇部に刻み目を施すものもある。胴部は余り張らず口縁部径より胴部径のやや大きいものもある。口縁部は細かな刷毛目調整で、胴部外面は刷毛目とタタキ調整があり、内面は荒い刷毛目調整。

2類（4～8）口縁部は「く」の字に外反するがやや直立する。底部は狭い平底となる。外面はタタキ調整で口縁部はよこなでを施す。

高杯（第8図）

1類（9）口縁部が外方に大きく開き、丸みを持った浅い杯部に続く。口縁部と杯部との境はわずかに稜線が残るのみである。脚部は細長い脚と思われ。

2類（10～12）小型の高杯で短かく外に張った脚が特色である。杯部は碗状になると思われ、脚部中程に穿孔のあるものが多い。内外面とも刷毛目調整。

碗形土器（第8図）

（13～14）大きく外側に開く口縁部ではほぼ直立し、底部は丸みを持っている。内外面は刷毛目調整やへら磨きが行われている。

鉢形土器（第8図）

1類（15～16）口縁部は外側に「く」の字に折れ外方にわずかに開くがほぼ直立する。胴部は丸くゆるやかに底部に移る、底部は丸底となる。外面はたたきや刷毛目調整で、内面は刷毛目調整が行われている。

2類（18～20・24・26）口縁部はほぼ直立し、口縁端部は平坦又は、斜めになり、丸みを持った胴部から丸底の底部に移る。内外面とも刷毛目調整が行われている。

3類（21～23・25）碗状になるもので、口縁は直立かやや外方に開く、底部は丸底となる。

支脚（第8図）

（27）ほぼ完形品で上端は斜めにつくられている。全体に厚く脚端部は丸くなる。外面は横方向の荒いたたき目が全体に残る。

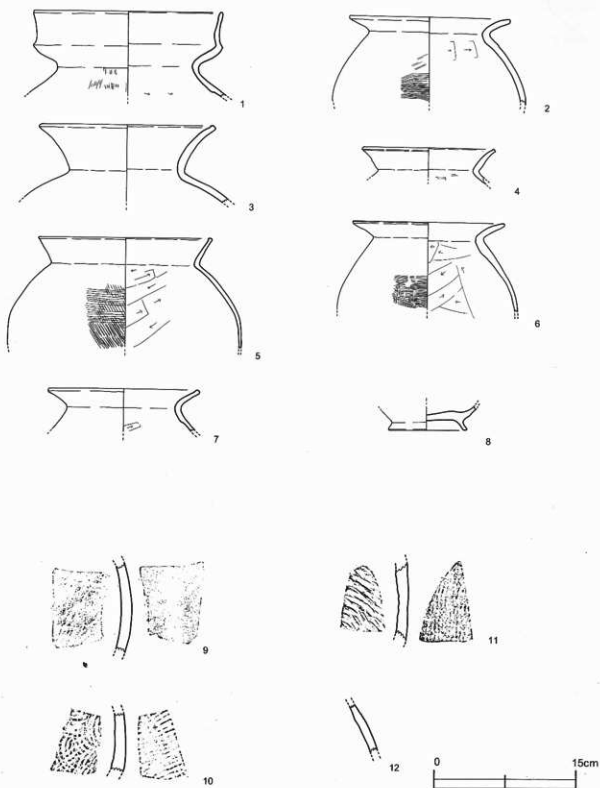
整地層出土・古墳時代・歴史時代の遺物（第9図）

整地層の上層からは古墳時代・歴史時代の土師器と須恵器がわずかながら出土しており、歴史時代の土師器と須恵器は上層面で検出された遺構に伴うものと思われる。下層からは弥生式土器に混ってわずかであるが、古墳時代初期の土師器が出土している。

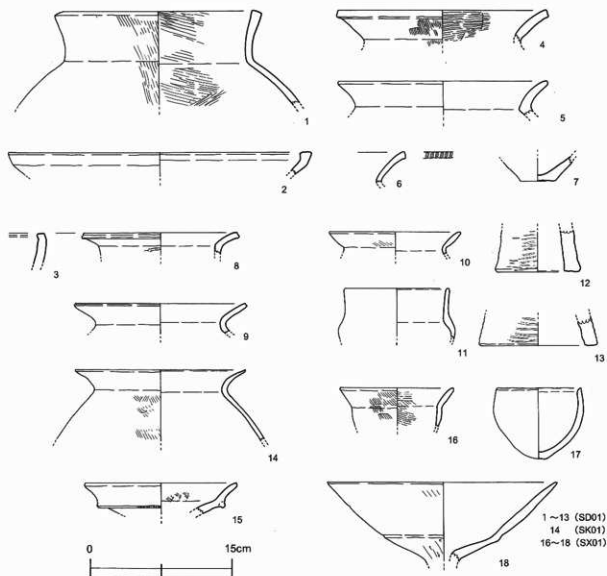
土師器

壺形土器

1類（1）二重口縁の壺形土器で、直立する口縁部と「く」の字に強く折れる頸部から胴部は球形



第9図 整地層上・下層出土 古墳時代・歴史時代土器 (1/4)



第10図 整地層上・下層遺構出土土器〔1/4〕

になる。口縁部から頸部にかけては内外面ともよこなで、胴部以下は外面は細かな刷毛目調整、内面はへらけずりで仕上げられている。

2類(3) 外方に大きく開く口縁部と球形の胴部で、外面は細かな刷毛目調整、内面はへらけずりで仕上げられている。

壺形土器(第9図)

1類(4・5) 口縁部が「く」の字に外反し、口唇端部をわずかに跳ね上がる。球形の胴部で、外面は細かな刷毛目調整、内面はへらけずりで仕上げられている。

2類(2・6・7) 口縁部が「く」の字に外反し、薄手のつくりで、口唇端部は丸くつくる。球形の胴部で、外面は細かな横方向の刷毛目調整、内面はへらけずりで仕上げられている。

脚付碗

(8) 脚部と碗部の破片である。脚は大きく外方に開く。底部はへら切り、碗内面はよこなで調整。

須恵器

(9～12) いずれも大甕の破片である。外面は格子目のたたきが多く(12)のみ沈線が描かれる。内面はくずれた形の青海波文で(12)のみ刷毛目調整である。

整地層上層遺構出土遺物(第10図)

溝(SD01)

弥生式土器

壺形土器

(1) 口縁部は「く」の字に折れほは直立し丸みを持った胴部に続く。

甕形土器

(4～8) 口縁部で薄手のつくり。が外方へ「く」の字に大きく開き、端部は角張ってつくられる。口唇部に刻目を持つものもある。

高杯

(2) 口縁部が直立し口唇部は平坦につくられる。

鉢形土器

(3) 口縁部はほほ直立し、口縁端部は平坦となる。

器台

(12, 13) 鼓状の器台の口縁部片で厚くつくられている。外面はタタキ。

土師器

甕形土器(第10図)

(9, 10) 口縁部が外方へ「く」の字に開き、端部は丸くつくられる。

整地層下層遺構出土遺物(第10図)

土壇(SK01)

壺形土器

(14) 口縁部が外方へ大きく開く薄手のつくりである。外面は刷毛目、内面はヘラケズリ。

(15) 二重口縁甕形土器で、外方へ大きく開き、端部は丸くつくられる。口縁部と頸部の境には貼付の台形突帯があり刻目を施している。口縁部はよこなで調整。

溝状遺構(SX01)

鉢形土器

(16) 口縁部は外方へ大きく開き、丸みを持つ胴部に続く。内外とも荒い刷毛目。(17) 碗状で深く、底部は九底で厚くつくられる。外面はヘラ、内面はなで調整である。

高 杯

(18) 口縁部が外方に大きく開き、丸みを持った浅い杯部との境は形散化した、稜線が残るのみである。脚部は細長い脚と思われる。

4. まとめ

今回の発掘調査は、調査面積が約100㎡とわずかではあったが、発見された遺構は、整地層上層を切り込んで発見された溝1条、柱穴10個、整地層下層から発見された土壌1基、溝状遺構1、柱穴3個がある。

整地層上層を切り込んで発見された溝と柱穴から、遺構の時期を示す遺物は出土していないが、整地層上層の上部から9世紀代の須恵器や土師器が出土しており、遺構の時期を示すものと考えられる。特に東西に延びた溝は、この地域に広く残る条里の東西の畦畔方向と一致しており、条間の溝の可能性もある。

整地層下層から発見された土壌、溝状遺構、柱穴についての性格は不明であるが、土壌、溝状遺構から4世紀初め頃の土器が出土しており、整地の時期はほぼこの時期と考えられる。

今回の発掘調査によって最も注目されたのは、調査区全体を厚く覆った整地層の存在である。厚い所では60～90cmもあり、多量の土器を出土している。白石遺跡から西側に200m離れた津江八升町遺跡からも、平成11年度道路建設に伴う発掘調査で、大規模な整地跡が確認されている。いずれも、下層から4世紀初め頃の土師器が出土しており、この時期に大規模な整地が両遺跡一帯で実施された可能性がある。

整地層から出土した遺物の多くは、弥生時代終末期の土器で完型に近いものや、大きな破片が多く、また、磨滅もほとんど無いところから、比較的近辺から運ばれてきたものと考えられ、矢部川の形成した自然堤防上には、この時期の大集落が存在しているものと思われる。

圖 版



1. 敷地層上層面での検出遺構 (SD01) [西より]



2. 整地層上層面検出遺構 (SD01.pit) 発掘後 (西より)



1. 溝 (SD01) 東側土層 (西より)



2. 整地層、上層発掘風景 (北から)



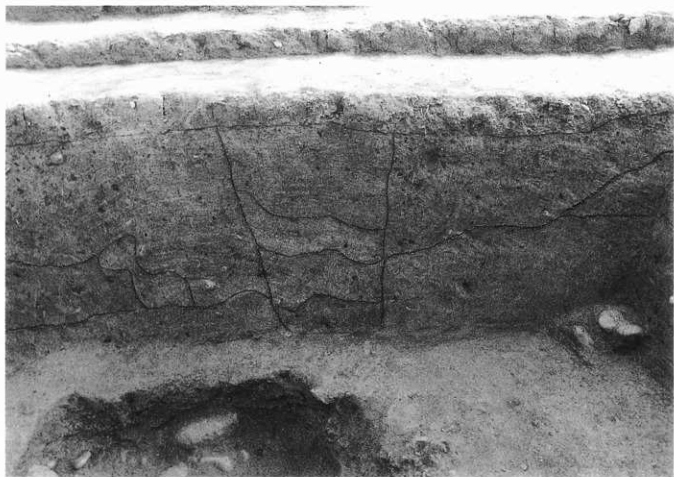
1. 整地層下層掘り下げ後 全景〔南より〕



2. 整地層下層掘り下げ後 全景〔西より〕



1. 調査区東側壁土層（西より）



2. 調査区南側壁土層（北より）



1. 溝状遺構 (SX01) [東より]



2. 土塊 (SK01) [北より]



1. 溝状遺構 (SX01) 内出土鉄滓 (東より)



2. 溝状遺構 (SX01) 出土土器



3. 整地層、下層溝状遺構 (SX01) 出土土器

報告書抄録

ふりがな	しらしいせき							
書名	白石遺跡							
福書名	福岡県八女市大字祈禱院字白石所在遺跡の調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 61 集							
編著者名	赤崎 敏 男							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943-23-1111							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査面積
しらいし 白石遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめし ちゅういん 八女市大字祈禱院 しらいし 字白石	402109		33 12 35	130 35 25	1999 10 04 ~ 1999 11 26	約100㎡	無線基地局 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
白石遺跡	集落 整地層	弥生時代 古墳時代 平安時代	整地層 溝状遺構 土壇 柱穴		弥生式土器 土師器 須恵器			

白石遺跡
八女市文化財調査報告書
第61集

平成12年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
印刷 (資)東兄弟印刷所
八女市新橋院563